永久機関のジン（４）

別句通〈bekkutooru〉

（アイに愛想を尽かされたジンの打つ手は？　３から続きます）
　陽はかなり傾き始め、街角は日中に溜めていた熱を放出するように空気がゆらめいていた。
　アイは少し人気のない細い路地裏を歩いており、あたりを見回した。
「あれれ？駅はこっちじゃないのかなー？」
　アイの行く手にはサングラスをかけた３人の若い男たちが磁気浮上(リニア)スクーターという乗り物を路上に停止させて、そのそばで立ち話をしている。
　アイは、細い通りでたむろしているそいつらの横を息を詰めるようにして通り過ぎた。
　そのとき、地面に物が倒れる大きな音がした。
「！」　アイがびっくりして後ろを振り返ると、スクーターが倒れていて、男たちがにやにやしてアイをなめ回すように見ていた。
「ねえちゃ～ん、俺の愛車に粗相(そそう)しといてなんのあいさつも無しかい」
　アイは一瞬顔をしかめた。
「あたしがそれに触れてもいないのに！あんたたちがわざと倒したんでしょ？」
　アイはそう言い終えるや、とっさに走り出した。
　しかしリーダー格と見られる鼻にピアスをした男がスクーターにまたがり、一瞬でアイの頭上を飛び越えてアイの行く手を立ち塞いだ。
「あ！」
「へ、へ、へ」
　アイが後ろを振り返ると残りの二人もスクーターにまたがって彼女に近づき挟み撃ちにした。アイの肩から鞄が地面にずり落ちてしまう。
「ねえちゃん、オイラ達といい所行かねえかーい？」
「いや～！」　アイが恐怖の表情に顔を歪めた。
「おいおい、野郎３人がガン首揃えててナンパの仕方もわかんねえのかよ！」
　アイが歩いてきた方向から聞き覚えのある大きな声の威勢のいい啖呵(たんか)が聞こえてくる。
　振り向くとジンがスピアをしたがえて立っている。
「ジンくーん！？」
　アイは慄然としつつも、半分安堵の表情に変わった。
「へっ。ガキがカッコつけんじゃねえよ」
「見なかったフリしてトンズラしろ」
　男たちはいきり立ち、めいめいチェーンやナイフなどの凶器を取り出して身構えた。
　興奮したリーダー格の男が声を裏返らせてすごんだ。
「チンピラども、トンズラすんのはおめーらだよ」ジンは陶然として男たちの虚勢を跳ね返した。
「いいからやれ！」
　アイの後ろにいたリーダー格が他の二人に命じるように発声した。
　それに反応した二人はスクーターのアクセルを全開させて奇声をあげてジンに向かっていく。

　それぞれ手にしたナイフやチェーンでジンを血祭りにするつもりである。
　しかしジンはそんな愚連の徒の急襲にも少しもひるむ事は無かった。
「しょうがねえな。まったくトキヲって所はひっちゃら、かっちゃらとどうしようもねえ連中が多いこと」
　男たちの乗った二台のスクーターは左右に別れて、ジンを両脇からそれぞれ攻撃しようと、乗り手が凶器をふり上げ、今にもジンをその毒牙にかけようとした。
　ジンは拳を作り、両腕をめいっぱい上に向けた。
「馬鹿か。両腕がちぎれ飛ぶぞ」
　リーダー格がアイのそばで悪魔の解説を行った。
「イヤッ！」
　アイが体を背けて両肘を折り曲げて両目をつぶった。
「ぐげぇ」
「ぶごぉ」
　二つのうめき声とともに何かが地面に落ちる音がした。
　アイがおそるおそるジンのほうへ両目を向けた。
　ジンが高く上げた両腕を軸にそれぞれ二台のスクーターがぐるぐる空しく円を描いていた。まるで見えないロープでジンが二台のスクーターを皿回しが如く振り回しているようだった。
　スクーターの乗り手は二人ともそばで苦しそうにして倒れかかっていた。そのうち一人は道路脇のドブに顔をつっこんでいた。
　またもう一人は道路脇のビルの壁にしこたま頭をぶつけたようで、額から出血していた。
「うう」
「いてぇよ～」
　それを目の当たりにしたリーダー格の男はサングラスがずり落ち、しょぼついた小さな眼をしばたかせた。
「なんなんだお前は？」
「俺は永久機関士、十村ジンだ！」
　ジンは左手に巻いたレンズを見せた。
「え、永久機関士？」「永久機関の提要は、素粒子を意のままにし、電気を、すべての物質を操ることー！」
　ジンが高らかに宣すると、リーダー格はスクーターから転げ落ちてしまい、腰が抜けて後ずさりしてしまう。
　やや気を緩めたアイがジンとリーダー格を見比べる。
　ジンがとどめの一叫び。
「鼻ピアスタコ！てめえを地球の反対側まで吹っ飛ばしてやるよ！！」

「ご、ごごごめんなさーい……」
　リーダー格は大声に一瞬びくついた。そうしたらジンは、
「、って言ったらどうする？」と言いはなち、いたずらっぽい顔つきをほころばせて舌をちょろ、っと出した。
　リーダー格は緊張の桎梏(しっこく)が一瞬で解けて失禁した。
　そして残りの二人とともにほうほうの体でその場を逃げ去った。
「行ったぜ、アイちん」
　ジンはアイが落とした鞄を拾い上げ肩に掛けてやった。
　「ありがと」
　アイは自然に頬が緩み、重たげになったように下ろした瞼で、浮ついた眼差しを半隠しにしてうつむいていた。
「ケガしてねえ？」
「あたしは大丈夫。でも、永久機関士って装備（エキップメント）を使わなくてもスゴイんだね」
「まーね。普通の人間相手に装備を使うわけにいかねえだろ。それより腹減ってねえか？」
「え？」　ジンが親指を上げてウインクしたとたんに腹のムシがグゥッとなって彼は赤面した。アイは片手で口を押え目を細めてを緩めて笑んだ。
　広い通りのビルの一階にあるカレーショップのカウンター席にジンとアイが座り、カレーライスを食べていた。
　スピアはジンの足下で眠っている。
「一本松博士が政府に逆らって刑務所に入れられたってのを親父から聞いたことがある」
　ジンが大皿に超盛りのカレーライスを獣のような勢いで食っている。
　アイはスプーンを一さじずつゆっくり口に運び淡々と語る。
「おじいちゃんは永久機関の技術を政府の勝手にさせたら大変な事になる、って言ってた」
　ジンはスプーンを持つ手を止め話す。
「俺の親父は今の不完全な永久機関を完全なものにできるかもしれない『夢の理論』を発案したらしいんだけど、発表しないうちに死んじまった」
　ジンが天井に目をうつろに向けてテーブル上のポットごと水をごくごく飲んだ。
「で、ジン君ににその夢を託したんだ」
　アイがジンの眼を見つめた。ジンは顔を落とした。
「でも親父と違って俺は天才じゃない。親父も果たして永久機関は人類の為になるのか迷ってたみてえだ」
「アタシのおじいちゃんは十村教授が人類の未来を開いたかも知れない、惜しい、ってよく泣いてたよ」
　ジンは再び残りの超盛りカレーを猛烈なペースでかっこんだ。皿に米粒一つ無くなると「ふぅ～」とカレー臭いため息をついた。
「アイはもう帰るの？」

「もう遅いから宿とろうかな。安いとこ空いてないかなー」アイは腕時計に映したネット画像に目をやる。
「俺がよく使ってるホテル紹介しようか？」

（果たして二人の夜やいかに？！　５に続く）

永久機関のジン（４）

http://p.booklog.jp/book/76481

著者：別句通〈bekkutooru〉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/76481

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/76481

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ